

THE SCARLET LETTER

『緋文字』研究

ま え が き

「主流」に特集号を、という声は何年も前からあったが、今回はじめて実現のはこびに至った。われわれが最初にとりあげたのはホーソンの『緋文字』の研究である。これは一九五八年に岩山太次郎、秋山健、松山信直、北垣宗治の四名が上野先生を囲んで月一回づつ集ってはじめて研究会の成果である。われわれはそのさい次の三点を申しあわせた。①各自が作品に当り、各自が発表し、批判し合うこと、②作家よりも作品自体の構造や意味の解明に強調点を置くこと、③研究会の成果はそれぞれが執筆して発表すること。さてこうして二回の綿密な討論をへたのち、それぞれの書いたものに、上野先生のご批判を頂いた。先生は快諾して下さったが、研究と教育以外に大学行政の激務に妨げられ、さらに半年間の外遊のこともあってようやく最近原稿を頂くことができた。きくところによると、われわれの原稿は先生とともに世界を一周してきたということである。さらに、われわれの大先輩である重久篤太郎先生から『緋文字』邦訳書目の玉稿を頂いてこの特集を飾ることができたことは望外のしあわせである。

この特集を編纂するに当り、われわれは引用テキストを統一した。いちばん手近く、信憑性のおけるものとして Modern Library College Editions の *The Scarlet Letter* (Random House, 1960) を選んだ。この作品から本文中に引用する場合は、このエディションに従って本文中に頁数を入れた。また人名をも仮名書きで統一し、フーサー・ディムズデー、ヘスター・プリン、ロージャ・チリングワースとした。

最後に同志社大学学長の激職にあつてこの批判を寄せて下さった上野直蔵先生に感謝を捧げたい。

一九六一年十月

松山信直
北垣宗治